

## 発表資料(日本語要約)

### カンボジア：カンボジアにおける CLC の取り組み

ラン・ソファット

カンボジア教育・青年・スポーツ省 ノンフォーマル教育局 識字後プログラム開発課

カンボジアの 15～24 歳の識字率は 87.8%であるが、CLC の取り組み概要・課題は以下のとおりである。

#### (1) CLCの概要

- CLC の活動は、ユネスコと日本ユネスコ協会連盟の支援により 1994 年に始まり、1999 年以降、カンボジア教育・青年・スポーツ省ノンフォーマル教育局としても行っている。
- 2010 年現在、242 の CLC で、8,000 人が学習している。
- CLC は、教育とコミュニティ開発の場として機能している。学習内容は、識字、識字後学習、職業訓練(機織り、散髪、バイク修理、裁縫、家畜飼育など、コミュニティのニーズによる)などである。

#### (2) 課題

- 人員および財政的な資源が限られているため、すべての人の学習ニーズを完全には満たすことができない。または 1 年間継続して CLC の学習を継続できない。
- CLC で学習した人びとのなかには、修了後、職を得られないこともある。

#### (3) 今後の期待

- CLC は研修の機会を提供するだけでなく、生産やマーケティングの場として機能すべきである。
- 政府からのさらなる人員・財政支援が必要である。
- コミュニティレベルから中央レベルまで、能力強化が不可欠である。
- 日本の公民館から学ぶことは多く、公民館とアジアの CLC の協力強化を促進したい。

### 中国：中国のコミュニティ教育の取り組み

ジャン・ジークン

中国教育省 職業・成人教育局 成人・継続教育課 課長

ダイ・ジン

中国広播電視学 国際交流・協力課

中国におけるコミュニティ教育の取り組み概要・課題は以下のとおりである。

#### (1) コミュニティ教育の取り組み

- 中国のコミュニティ教育は、1980 年代に、若者のための放課後学習として、上海など 4 つの地域で始まった。1990 年代には、すべての人びとに対する教育、そして生涯を通じた学習という課題に対応する必要がでてきた。2000 年以降、いつかの地域において、コミュニティ教育のパイロットプロジェクトを実施している。
- 遠隔教育や衛星テレビなどを含むツールも活用して経験を共有している。

## (2) 課題

- ・ 非政府組織や様々な社会組織の参加が、十分とはいえない点が挙げられる。政府の役割は、主にガイダンスや評価に重点を置くべきである。
- ・ 中国東部では、コミュニティ教育は急速に普及しつつあるが、西部ではまだ不十分である。
- ・ コミュニティ教育に関する規定や政策が未整備である。

## インドネシア(1): インドネシアにおけるノンフォーマル教育に対する PKBM(CLC)の役割

アデ・クスミアディ

インドネシア国民教育省 インドネシア第2リージョン(セマラン)

ノンフォーマル・インフォーマル教育開発センター 所長

### (1) 教育と社会の現状

- ・ 以下の三点が改善すべき現状として挙げられる。①15 歳以上の非識字者 8,300 万人あるいは人口のうち 5.1%、②求職者 49.78%/年、失業者 3.68%、貧困率 13.98%、③初等教育中途退学者 20 万人/年、早期幼児教育(0~6 歳)達成率 53.1%。

### (2) ノンフォーマル教育政策と主要事業

- ・ 早期幼児教育及び識字教育の充実、女性の能力開発、各種トレーニング及びライフスキルの提供、ジェンダー平等教育、CLCや教育事務所等機関の強化など。

### (3) 課題

- ・ CLCの質の向上には、CLCの状況に関するデータ整備、人材強化、ノンフォーマル教育プログラムへのアクセスやサービスの強化と財政支援、情報システム及びネットワーキングの発展、インフラ改善、年間行事やワークショップ、職業訓練等の活動に対する支援などが必要である。
- ・ 克服すべき課題として、①ステークホルダー間の包括的・組織的体系の未整備、②各CLC運営者及び講師の能力の不均衡、③情報及びアクセス、ネットワーク、財源等の限界、④インターネットの未整備、⑤政府、NGO、ステークホルダー間における統一評価システムの未整備などがある。

### (4) 提言

- ・ ①CLCとその連携に対する強化と調査、②ステークホルダー間の体系的・統合的な調整と基本計画の整備、③最低限のインフラ整備、④CLC運営者及び講師の継続的な能力強化、⑤各地におけるパイロットプロジェクトの実施、⑥日中韓等外国とのネットワーク強化などが挙げられる。

## インドネシア(2): インドネシアにおける高等教育の役割—CLCの発展促進の視点から—

ジャウジ・モエドザキル

国立マラン大学 ノンフォーマル教育学部 学部長

高等教育は、CLCの発展に積極的な役割を果たしていく可能性を有しているが、インドネシアにおける高等教

育とノンフォーマル教育の取り組み概要・展望は以下のとおりである。

(1) 高等教育機関の取り組み

- ・ 高等教育機関では、教職員、専門家、大学生及び大学院生による調査などで得られた成果をCLCや社会教育コーディネーター、CLC運営者へ還元している。
- ・ 1956年から限定的に開始された関連プログラムは、現在40大学の規模に拡充している。

(2) 連携体制

- ・ 政府のノンフォーマル・インフォーマル教育局と高等教育のノンフォーマル教育学部との間で連携体制が整備されつつあり、ノンフォーマル教育のためのコミュニケーション・フォーラムが整備されている。

(3) 今後の展望

- ・ 上記のようなパートナーシップを通じ、CLC発展に向けた戦略的プログラムは今後統合的アプローチによって形成されるべきである。

## ラオス：ラオスにおけるCLCの取り組み

ウンペン・カマン

ラオス教育省ノンフォーマル教育局 地域教育推進担当 副局長

ラオスの成人識字率は78%であるが、CLCの取り組み概要・課題は以下のとおりである。

(1) 取り組み概要

- ・ 1990年にユネスコの支援で少数民族の女性と女子のための識字・職業訓練のプロジェクトを行った後、1992年より、2つのCLCを設立するところから始まった。2010年現在、320のCLCがある。
- ・ CLCの全般的な目的は、特に教育的に不利な立場に置かれている人びとに対して、識字や、生計を立てるのに必要なスキルを学ぶ学習機会を提供することである。
- ・ CLCの管理のため、各CLCに委員会が設置されている。メンバーは、長老や女性、若者グループなどであり、毎月会合を行う。CLCのファシリテーターは政府の教師かボランティアであり、毎月郡の教育局に報告する。

(2) 課題と提言

- ・ CLCに対し、コミュニティの人びと、および行政が完全に理解を示し、参加しているわけではない。
- ・ すべてのレベルにおける経験のあるスタッフの不足。
- ・ ファシリテーターの能力不足。
- ・ 予算・教材不足。
- ・ モニタリング・評価体制の強化。
- ・ 政府、国際機関、NGOとのネットワークの強化。

## タイ(1)：タイにおけるCLCの取り組み

ソムヨス・ポエンポムサチャレオン

タイのノンフォーマル教育スクールに通う学生のうち公教育への就学の割合は 19%、未就学割合は 81%であるが、CLC の取り組み概要は以下のとおりである。

(1) CLCの概要

- ・ 教育の機会の提供、経験やノウハウ、ローカルナレッジの伝達と共有、地域住民のニーズに基づいた活動拠点の提供を行っている。
- ・ 2010年現在、8,605のCLCがあり、教材やデータベース、遠隔教育設備、職業訓練、スポーツ、学びの成果の展示等のコーナーが設けられている。
- ・ CLCは、主に以下の活動を促進している。①基礎教育活動、②継続教育活動、③インフォーマル教育活動、④コミュニティ活動、⑤ICT教育活動、⑥ICTによる情報提供活動。

(2) 教育政策

- ・ 質を伴う 15 年の無償教育、質を伴う生涯教育、質を伴う学校/教育施設/学びのためのソースの整備、ICT教育、教師の質の向上を政策として打ち出している。
- ・ 2009年から2018年にかけて第二次教育改革を実施しているが、CLCは地方におけるコミュニティの自立やエンパワーメント、ICT拡充のために重要な位置づけがされている。
- ・ 地方におけるCLCは、インフォメーションセンター、サービスセンター、学習センター及びコミュニティセンターの役割を担っている。

(3) 特色ある活動

- ・ ICT教育の拡充やサービス提供のために農村など地方を巡回する特別車輛で活動を行っている。
- ・ 同様に各地において巡回式で短期の職業訓練を実施している。

**タイ(2)： CLCを持続するためのコミュニティのオーナーシップと外部からの支援に関する調査研究**

アンヤマニー・ブラナカノン

タマサート大学 准教授

CLC を持続可能なものにするために重要であるコミュニティのオーナーシップおよび外部からの支援について調査研究を行った結果、以下が明らかとなった。

(1) コミュニティのオーナーシップ促進に不可欠なこと。

- ・ CLC の活動は、コミュニティのニーズに合致すること。
- ・ 互いの尊重、平等、公正、そして独立性という概念を重視すること。
- ・ 人びとが持つ多様な考えを考慮して CLC を管理する必要がある。

(2) 外部からの支援で留意すべきこと。

- ・ CLC リーダーや委員会メンバーは、外部資金を得るために必要な各種条件・規定に則って資金を調達・実施できるよう、プロジェクト管理、会計報告、監査などのスキルを習得する必要がある。

- ・ CLC リーダーは、既存の地域の知恵を活かしつつ、外部からの新しい経験を学び、両者を統合することが重要である。
- ・ 外部からの支援者の役割は、財政の力などで「独占」するのではなく、CLC リーダーおよびメンバーと同等であるべきで、お互いに助け合い共有するという姿勢が大切である。

### (3) 提言

- ・ CLC の管理には、女性や子どもを含む多様な個人、グループに参加の機会が与えられるべきである。
- ・ オーナーシップを促進するため、参加者の多様な関心に合致するような生産活動を行うことへより注力すべきである。また、活動は柔軟であるべきである。
- ・ コミュニティの強み、可能性、そして課題を特定するため、コミュニティでの調査を行うことが重要である。
- ・ コミュニティのリーダーは、メンバーから受け入れられる代表性と、提案や批判などにも耳を傾けるコミュニケーションの方法を確立することが必要である。

## 韓国(1)：韓国における生涯学習

パク・サンオク

韓国平成教育(生涯教育)振興院 生涯教育政策課 上級プロジェクトマネージャー

韓国のCLCの取り組み概要・課題は以下のとおりである。

### (1) 公民館との共通点と相違

- ・ 韓国には日本の公民館とまったく同じ機関はないが、生涯学習センター、コミュニティセンターなどの生涯学習機関がある。
- ・ 生涯学習機関は、生涯教育令で定められているが、次のように多様である。学校の中で行われるもの、家、企業、NGO、メディアを通じてなど。
- ・ 生涯学習センターでは、識字教育や、お年寄りのための情報教育など、「公平な教育機会の提供」に努めるほか、ゲストスピーカーを招いての講演や、文化の多様性を理解する企画、生涯教育者への研修なども行っている。

### (2) 課題

- ・ 生涯学習センターの活動の実施を外部委託で行うか、市行政による直接管理で行うか、それぞれの利点と課題を考慮する必要がある。

## 韓国(2)：韓国における3種類のCLC-現状と課題-

チェ・イルソン

慶熙大学校(キョンヒ大学校) 教育大学院 准教授

韓国では、公民館に似た学習機関として、以下の3つが挙げられる。役割は、現地住民に対して生涯教育プログラムの提供することである。

(1) 平生学習館(生涯学習館)

- ・ 地域教育事務所の監督者が設立・運営するか、既存の施設を平生学習館として任命する。
- ・ 予算は、地域教育事務所から得られる。
- ・ 平生学習館数： 404 スタッフ数： 1,933 人 学習者数(年間)： 613,662 人

(2) 平生学習センター(生涯学習センター)

- ・ 市長が設立する。予算は現地行政より得られる。市長が財政支援することもある。
- ・ 230 の地方政府のうち 117 が平生学習センターを運営している。

(3) 住民自治センター

- ・ 地方政府から補助金や、ファンドレイジングにより予算を賄う。
- ・ 文化・余暇、市民教育、コミュニティ開発、市民の自治促進などの役割がある。
- ・ 2,621 の住民自治センターがある。

行政機関の縦割りなどにより、平生学習館における市長や地域教育事務所の監督者の役割・責任が明確でない点や、平生学習センターの法的な正統性、財源・人員の確保などの課題がある。今後の予想としては、平生学習館の数は減り、平生学習センターが CLC として主導的な役割を担うのではないかと。

## ベトナム：ベトナムにおけるCLCの取り組み

フォン・トュアン・リー

ベトナム教育訓練省 継続教育局 継続教育上級専門家

ホーチミン元大統領が学習は生涯を通じた仕事であると 1945 年に述べたとおり、ベトナムでは非識字の撲滅が重要視されてきた。ベトナムにおけるCLCの取り組み概要は以下のとおりである。

- ・ 2010 年の CLC の数は 9,990、学習者数は 13,937 人と、国の多くの地域に行きわたっている。
- ・ CLC での学習は、テーマごと・特別な学習、職業訓練、識字、識字後学習の順に学習者が多い。
- ・ CLC の設立に関しては教育法や各種政策に明記されており、制度化されている。
- ・ CLC 管理委員会のメンバーは次のとおり： ディレクター(村長や村の人民委員会の副委員長)、副委員長(小学校の校長など責任のある人、女性組合、若者組合など)、出納係、ファンリテーター。

CLC の活動には、行政、地域、住民の間の綿密な連携が重要であると同時に、ユネスコや ACCU、他国の CLC との国際的な連携も不可欠である。

\* 岩佐敬昭・文部科学省生涯学習政策局社会教育企画官の発表資料は、日本語／英語併記であるため、95 ページを参照。

## 国際シンポジウム：公民館とアジアのCLCの協力 ラウンドテーブル議事録

### 地域住民の参加の重要性

**ブラナカノン氏**：住民の手により組織され運営されるCLCは、小さく且つ効率的である必要がある。従来タイでトップダウン的なCLCの運営方式が多かったが、うまく機能しなかった。

**ポエムボムサチャレオン氏**：政府によるCLCの運営は、EFA(万人のための教育)が目的となる可能性が高い。現在社会においては政府と他の組織、例えばNGOや一部の企業との間で協力関係が形成されている。CLCがパワーをつけ社会的認知度が向上すればこれらの協力は一層促進されるだろう。

**大安氏**：アンヤマニー・ブラナカノン氏が発表で紹介したプログラムの例は、ユネスコがコーディネートして5、6カ国で実施した。「参加」という要素についてだが、先の議論であったように、タイやインドネシアではトップダウン方式がうまく機能しない面がある。住民の意思が重要性を持つ。逆に、ネパールやバングラデシュにおいては、NGOなどが特に指摘しているが、建前上の「参加」が多く見られる。実際には中央からトップダウンで住民を動員している場合が多い。このように、参加といっても実情は様々だ。今回のシンポジウム参加国のCLCに対して、実際の状況はどうかをお聞きしたい。住民が行政から指示を受けて参加させられているのか、それとも自発的に参加しているのか、住民が決定権まで持って参加しているのか。自発的な参加にするためにはどのような方法が用いられているのか。参加型手法は流行しているが、必ずしも本当の意味で根付いていない。住民たちが参加したいと思う環境を整えるのは、国により相違すると思うがどうだろうか。

**笹井氏**：住民が喜んでCLCの活動に参加するためにはどのような工夫が必要だろうか。日本の場合、公民館は基本的に地方自治体が設置することになっているが、全ての住民が参加しているわけではない。よって日本を含めた参加国全てが同じ問題を有していると言える。

**クスマアディ氏**：インドネシアではオープン政策と呼ばれるアプローチを取っている。どのような活動をしたいかを住民達自身から提案できる政策のことで、草の根や各CLCから応募があったプログラムに対し、県及び州レベルの政府が選定を行い、予算確保やモニタリングをするものだ。

**載氏**：社会・経済の開発に伴い、住民達は社区(コミュニティ)教育学校や社区センターのプログラムへ積極的に参加している。しかし、政府が住民からの要望にどのような形式で且つどれだけ応えられるかが問題である。高齢者向けの社区大学は多くあるが、対象にできる人数は限られている。

**神代氏**：日本の場合、多くが行政機関による公民館であるから、こうした公民館が「参加」をどのように成功に導いていくかが問題である。現在多くの公民館が抱えている課題は、いかに多くの、そして多様な人々の参加を促していけるかということだ。特に、若年層やその地域で色々な課題を抱えている住民、例えば相談相手のいない子育て中の母親、家も仕事もなく困窮している人や、地元の生活に馴染めない在日外国人等に対し、いかに公民館が学ぶ場を提供できるかが実は大きな課題だと言える。それは行政主導で試みても、なかなかうまく機能しないと思う。公民館の運営形態の検討にタイでの例を参考にすることもできる。

## 参加を促す知恵と課題

**笹井氏:**住民のニーズをプログラム化していこうとする一方で、識字など学ぶべきプログラムを提供する必要性もある。そのバランスを考慮した上で、参加を促す知恵とは何だろうか。日本の公民館ではどのような方針の下プログラムを提供しているのかをお聞きしたい。

**中曽根氏:**自治体では、環境、高齢者、子どもなどの各解決課題に応じた担当部署を設置している。社会教育課では以下の2つの観点から事業を設定している。一つは、行政側から学ぶべき課題を設定するというより新しい課題を掘り出すように、住民の参加型組織と一緒に活動。もう一つは、部署毎の各課題に応じた啓発活動。社会教育課では、ノウハウというより様々な課題に跨って生きている生活者、コミュニティを支える概念である「人としてどう生きていくか」という視点を基点としている。そしてその人たちが生き生きとするようなテーマ設定から、その先に人々がどのようにつながっていくか、そしてコミュニティのあり方というところまでテーマを拡大していきたい。

**山本氏:**岡山市の公民館活動は非常に活発で、毎年海外の CLC の関係者を招聘し、日本の NGO と一緒にワークショップを実施している。昨日まで岡山で開催していたワークショップの議論で話題になったのは、公民館のキャパシティをいかに向上させていくかということだった。一つは公民館のスタッフ、もう一つは地域力をつけるということだ。特にスタッフの人間力をつけることが、公民館利用者の増加や住民参加を促進する要素となる。そのためには窓口での挨拶や担当外範囲の質問に対する積極的な姿勢も重要だ。リピーターを増加させることが肝心なので、例えば在日外国人のための日本語クラスの生徒に、今度は各国料理講習などのプログラムの講師になってもらうなどの工夫もできる。近所の住民が自分のスキルを伝えることにより参加者を増やしていくことができる。

**小笠原氏:**住民によるニーズのプログラム化と、社会的ニーズのプログラム化のバランスは、現場の職員にとって非常に重要な問題だ。社会的ニーズ・地域課題の活動は参加者が少なく、どの公民館も問題を抱えている。職員の働き方を変えるという発想が必要だ。例えば地域に通い、学校教員等と話す場を持つ。まず職員が繋がらないと住民が繋がらない。しかし、こうした活動は公民館職員の間でも理解を得ることが難しい。公民館創成期の原点に戻ることが鍵ではないかと思う。

**岩佐氏:**成功している CLC の共通項は、人々の所得・生活の質の向上につながるプログラムを提供していることだ。これには、具体的にどのような例があるだろうか。

**モエドザキル氏:**アカデミックな観点からも、CLC へ住民を積極的に参加させることはインドネシアでも大きな課題だ。地域参加型の概念はあるが、実行することは簡単ではない。地域の参加を得るためには、地域に根付いたプログラムが必要だ。例えば、インドネシアではムスリム人口が多いので、宗教的なプログラムは好まれる。参加率が高いプログラムはコンピュータや英語学習関連だ。だが、継続的に参加率を上げていくことは大きな課題だ。昨日日本の公民館を視察し、学ぶところが多かった。





**ブナカハシ氏:** タイ南部の成功事例についてお話ししたい。そこはマンゴスティンの産地だが、卸業者が価格を決めるため、地域住民は買い取り価格を低く抑えられるという問題を抱えていた。そこで住民代表が議論の場を持ち、コミュニティとしての解決案を模索した。まず決めたのが、各農家が個別にマンゴスティンを売らず、農家全体で価格設定をすること。そして政府が技術センターを設置し、若年層を中心にマンゴスティン栽培の質を向上させるサポートをした。こうした活動の後、市場価格より高い価格を設定したが成功した。これを資金源に、地域住民の利益に合うビジネスが展開されている。これ以降、マンゴスティン関連のプロジェクト実施時は、政府は住民代表グループの許可を得ることが必要になった。コミュニティはパワーを持つようになり、政府は住民の意見を尊重する必要性が発生した。当時のリーダーは変わらないが、活動の中心は段々若い世代に移行しつつある。こうした例からもコミュニティの計画は、地域の現実に即したものである必要がある。住民の信頼を得たリーダーの性格も重要であり、参加促進のための環境を整備することも重要だ。住民の利益に立ち、安心してノーと言える環境でなければならないし、それがCLCの目的の一つだ。

**カマン氏:** コミュニティレベルの自発的参加、住民の決定権についてお話ししたい。これまでの議論と昨日の公民館への視察を踏まえ、CLCには様々なレベルがあり、活動内容や目的も様々であることがわかった。ラオスの場合、地域住民の多くは教育レベルが高くない。ラオスの識字率は78%で、CLCの大きな課題の一つだ。ラオスでは国民の多くが農民であり貧困率も高い。食料の確保や教育という基本ニーズが第一の課題であるため、住民に自発的参加を求めることは難しく、漸次促進していくしかない。政府の役割はファシリテーターとして位置づけられる。プログラムはニーズに根ざしたものが必要で、基本的スキルや生活向上に関係したもの以外、貧困層に訴えることは難しい。多くのプログラムは識字と基礎的職業訓練を組み合わせただけだが、生活に役立つことを理解すれば住民は参加する。そして職業訓練の受講で所得が向上すると、一層の参加が得られる。また、地域住民の中からのリーダーシップは参加の重要な鍵である。

### 地域住民をリソースとする学びへ

**末本氏:** 現在の成人教育の国際的な議論で重要なポイントの一つは、“self directed learning”という観点だ。どの国でも共通しているのは、プログラムを政府やスタッフが用意し、そこに住民が参加するという学習形態だ。この場合責任の所在はスタッフにあり、組織する側と参加する側という区別が生まれ、教える側と教えられる側という立場の違いも生じる。しかし、学習者自身ももっと学ぶ力を、また個別の経験から得た知識を有しているはずだ。識字教育の場合でも、成人は生活の経験から様々な知識を持ち、ニーズも本人が自覚的に判断できる。これらをどのように生かしていくかが課題である。日本の経験でいうと戦後の公民館の出発点は「たまり場」だ。地域住民が集まる場所で、そこに皆が各自の問題を持ち寄ることができる場を作ろうと政府が呼びかけて出発したと言える。したがって何かを教えようという議論によりできたのではない。これは行動による学び“learning by action”という観点から改めて見直されるべき取り組みだと考えている。用意する側だけがどうすれば良いかではなくて、住民側からどのようなリソースを得るかという観点も重要ではないか。

**白戸氏:** 戦後復興期は、生活が厳しく人々が共通の課題を持ちやすかった。特に多くの方は農業を主体としていたし、さきほどのタイの事例のように農産物の価格を上げる活動も公民館で実施していた。しかし、地域が豊かになるに伴い共通の課題は減少し、ここ10年、20年は公民館活動の中だるみが出現した。個別に就労し所得を得

られるし、行政の機能充実で公民館に頼らなくてもよくなった。しかし、長野県松本市の状況は、現在の日本社会における行政や経済の行き詰まりの中で、公民館を活用できないかという視点に回帰している。これまでの議論を踏まえて今後の CLC と公民館の協力における課題を考えると、時代、文化、コミュニティの社会的構造が多様であることを考慮し、経験と交流によってそれらを個別に共有し、解決につなげていくことが重要であると思う。

また、住民の主体的参加の点で現在松本市の問題は、むしろ住民達の個別化・孤立化したばらばらのニーズをどのように一つにしていけるか、そこに公民館がどう対処していくかということだ。住民の主体化を促進する公民館の在り方がここでも問題になっている。ただし、いずれにしても公民館がうまくいくというよりも、コミュニティが良くなる、そこに住む人々が幸せになるために公民館がどうあるべきかという視点で考えていく必要がある。

### 交流による効果

**山本氏:** アジアの CLC と公民館は、2006 年に松本市で交流がなされ、また ESD モデル地域である RCE (Regional Centre of Expertise) に指定されている岡山でも 2007 年から ACCU や UNESCO と協力しながら ESD 推進のための公民館サミットが毎年開催されるなど交流が進んでいる。東京ではなく、地方で交流することに意義がある。岡山では、当初国毎に経験や背景が異なるので戸惑いも多く、半年をかけて社会教育主事を中心とする公民館担当者や町内会と協力して準備を行ったが、これまで 4 回実施し、次第に議論もかみ合うようになり、最近では姉妹公民館として提携する例も出てきた。こうした交流の中で、アジアの人達が驚き感心することは、日本人にとっては意外なことが多い。例えば、公民館のプログラムをチラシにして何千とある全世帯に配布したり、住民が自主的に掲示板に貼り出したりすることや、日本の田んぼの畦道の清潔さなどだ。日本側もこれまで大切にしてきたことは重要なことだと改めて認識することができる。また、受入れる公民館関係者からは、地域について改めて勉強する機会になり、多様なアジアの関係者と交流ができたことの意義は大きかったという声が聞かれた。

**白戸氏:** 松本でも 2006 年に国際会議を開催したが、その際高齢者ばかりで若者の参加が少ないことが指摘されたところ、最近では高校生や中学生が公民館を舞台に活動するようになってきた。交流は一方的では疲れてしまうので、こちらも学ぶことがあるという態度で臨むことが必要だと思う。

**川上氏:** 日本ユネスコ協会連盟は、1989 年から世界寺子屋運動という名称で識字教育支援や CLC プログラムを行っている。だが一方的な支援ではなく現場から日本が学ぶことも多い。日本の若者をスタディツアーに参加させ学ばせることも重要だ。カンボジアでは、地元の英語専攻の大学生が毎週末ボランティアで講義をする。職業訓練でも、相互の学びの場という視点が重要だ。ファシリテーターを除き有給のフルタイム職員がいなくても住民がボランティアで支えている CLC が多く存在する。

**クスマディ氏:** インドネシアの政策は、IT や幼児教育、ESD を CLC のプログラムに盛り込むことなど、日本の松本市を含め他国の例を参考にしている。識字や幼児教育等の分野を選定し、主流化するという政策も他国から学んだものだ。

### 公民館とCLCが担う役割

**チェ氏:** 末本、白戸両先生の意見に同意する。同じ問題が韓国でも重要性を増している。人口の急速な都市への集中は、世界的に見ても非常に深刻であり同時に過疎化の問題を引き起こしている。地方の活性化に向けた解

決策の一つが生涯教育であると思う。草の根の活動を活性化するには、地域活性化のために積極的に活動している住民達に対するリーダーシップトレーニングや参加住民をファシリテートしていくことが重要だ。これまで CLC は政府により運営され活動を行ってきたが、最近では住民達の自発的参加を促進する試みが進められている。

**張氏:** 中国では若者による活動が活発化している。教育関連のコミュニティ活動が注目を集めており、例えば「4時半学校」と呼ばれ、両親が多忙である子供達の放課後の世話を若者が中心に行っている活動もその一例だ。また、春夏のキャンプや楽器、語学、理数科目の個別指導など若者が関わるプログラムの幅は広い。昨日の公民館視察の印象では、日本での地域住民の自発的参加は多いように感じたが、公民館活動は社会においてどのような位置づけと役割を担っているのかお聞きしたい。

**松本氏:** 公民館の役割は課題の解決だと思う。様々な「問題」があるが、それを解決しようとした時、「課題」に変わるのではないだろうか。このために島根県では「地域力醸成プログラム—公民館の力を利用して地域を活性化しよう」というプログラムを実施している。公民館もかつては現在の発展途上国と同様の課題を抱えていたが、現在は先の議論で出たように問題の質が変化してきている。課題を発見し、解決策を提案していかなければ存在意義は薄れてしまうだろう。

**クスマアディ氏:** スハルト政権時代、一般市民は国づくりに受身で関心が薄かった。最近になって CLC の住民参加もある程度促進されてきたが、社会の中のあるパターンや規範は変化していない。したがってコミュニティの社会参加という事項を、政府と切り離して考えることは現段階では困難だ。国民の教育レベルが向上すれば、住民の参加度も向上するだろう。よって政府の介入は、現段階においてある程度は必要だと思う。昨日の視察で感じたことは、CLC においても公民館のように大学で専門知識を習得した人材が必要だということだ。

**角南氏:** コミュニティはローカルナレッジの宝庫だと言える。しかしこれらの知識は形式化されていないため発見しにくい。これをいかに引き出し、地域の発展に活用していくかということが重要だ。外部からの働きかけで計画・実行し、住民を乗ってもらうという形式は機能しない。解決策は住民の中にある。ローカルの中から知識を生み出し、引き出し、生かしていく CLC であれば、将来において可能性を秘めている。これは従来とは逆方向の学びの過程であり、「教育」と「学び」の対比が必要だ。

## ESD及びフォーマル教育との関連性

**笹井氏:** 直接交流し議論すること、特に現場レベルでの交流がノンフォーマル教育においては重要だと思う。ラウンドテーブルの最後に、アフリカからの唯一参加して下さったオブザーバーのオヴァーサン・シュンバ・コッパ—バルト大学教授にこれまでの議論の感想をお聞きしたい。

**シュンバ氏:** 公民館や CLC は、地域開発と教育に大きなパワーを有していることを改めて認識し、法的枠組みの中で制度化されサポートされるべきであると感じた。しかし同時に、CLC の活動は、課題に対し地域住民による強いオーナーシップ、責任が必要であるとも感じた。アフリカでは、二つの欠乏が問題となっている。一つは財政及び技術の欠乏、もう一つはノウハウの欠乏だ。後者は次のようなプロセスで生じている。フォーマル教育システムと地域で起こっていることの間に関連性がなく、その結果コミュニティの人々の目からは、フォーマル教育が自分たちの生活の質の向上に関係しているということが見えず、地域開発に役立たないものとして考えてしまう。大

学における研究も、自分達が蓄積した技術のノウハウをコミュニティに持ち込もうとしないため、コミュニティの住民はフォーマル教育システムが自分達の慣習や知識を考慮せず、むしろそれらを侵害するものだと感じてしまう。こうした要素がノウハウの欠乏につながっている。

CLC の活動をアフリカにおいて拡大していくには注意が必要である。コミュニティのニーズを満たし生活の質を向上させていく上で、CLC における教育の質や内容をそれらときちんと関連させていくことが重要だ。CLC は異なる世代が集まり学ぶ場であるから知識や価値観の相違が大きく、更に、教育はこれまで貧困削減や疾病との闘い、早魃や気候変動といったコミュニティの住民達の生活に重要なことを取り上げてこなかった。結果として、人々には持続可能な開発という問題が起きていることがなかなか見えてこない。しかし、アフリカでの活動は地球上の他の地域の人々の生活に影響するし、その逆も起こっているのだということを忘れてはならない。このシンポジウムのほぼ全ての発表で ESD が言及された。CLC は人々に学びを提供し、生活の質を向上させることにより ESD 推進の重要な手段となり得るだろう。

アジアという枠を越えた国際協力、特にアフリカも含めた協力について経験を共有することが重要ではないだろうか。経験を相互に共有できる文書により CLC が識字や職業訓練、食糧問題、資源の管理などを通じて地域の教育や発展の手段になると理解できるだろう。例えば、ザンビアの首都ルサカの郊外には健康や衛生に問題を抱えている地域があるが、そこではコミュニティに根ざした組織がその解決のために活動している。CLC は彼らと経験を共有し、彼らとともに活動の計画、実施、決定を行うことができる。

フレームワークとオーナーシップの重要性が認識されるべきだと思う。大きな問題は、ノウハウの欠乏とフォーマル教育とノンフォーマル教育の関連性が意識されていないことだ。コミュニティの住民達は学校が自分達の発展に資することはないと感じ、自分達のコミュニティとは関係ないという認識のずれが生じている。住民達は、自分達のローカルな知識やスキルは、役立つものだということが認識できずにいる。CLC を通じてコミュニティと教育をつなげる必要があると思う。住民達の認識を CLC はコミュニティに直接関係する存在であり、自分達にチャンスを与える存在であるという方向へ導く必要がある。CLC は、ESD にとって重要であり、ESD にとってアフリカは重要である。国際協力という側面からアフリカにも目を向けてほしい。文書化された知識は地域を越えて共有する必要がある。

**岩佐氏:**時間が限られており、社会教育のリーダーの素質に関するテーマなど深められていない議論も残されているが、今回のシンポジウムで良かったことは、昨日公民館の現場を参加者達に見てもらい、それをバックグラウンドとして共有した上で議論に参加していただけたことだと思う。社会教育の分野では、地域特有の問題だと考えられてきたことも、実は環境問題のように世界の他の地域にもつながっているという話があった。こうした観点によっても、公民館の活性化につながる切り口が生まれるのではないだろうか。社会教育は現場が重要だ。今後も他の地域も含め交流を継続させていくことができればと思う。

## **Round Table Conference Proceedings**

### **International Symposium on KOMINKAN and CLC Cooperation in Asia**

#### **Importance of the participation of local residents**

**Ms. Buranakanon:** CLCs (Community-Based Lifelong Learning Centers) are organized and operated by residents themselves, and need to be small and efficient. Heretofore, a large number of CLCs in Thailand have been administered using the top-down approach, but the system did not function well.

**Mr. Phoemongsachareon:** When CLCs are administered by the government, it is highly probable that the purpose is to provide EFA (Education for All). In today's society, a collaborative alliance has been formed between the government and other organizations such as NGOs and some companies. If CLCs power up their strength and social awareness increases, such collaborations will be promoted even more.

**Mr. Oyasu :** The examples of programs introduced by Mr. Buranakanon during his presentation are coordinated by the UNESCO, and are being carried out in five or six countries. Regarding the element called "participation", the top-down approach did not function well in Thailand and Indonesia, as discussed earlier. The wills of local residents are of great importance. On the contrary, in Nepal and Bangladesh, NGOs have been indicated to "participate" only in principle. In reality, local residents are most of the time mobilized by the central government through a top-down communication. Thus, the actual situation of "participation" has various aspects. We would like to ask about the actual situation of the CLCs in the countries participating in this conference. Does the government dictate the local residents to participate? Or do they participate voluntarily? Do local residents have the right to make decisions as they participate? What kind of method is being used to encourage voluntary participation? Participatory approaches are popular, but are not necessarily rooted in their true meaning. It is true that circumstances are different from one country to another, but how do you create an environment that will make local residents want to participate ?

**Mr. Sasai :** What kind of scheme need to be devised in order to make local residents willing to participate in CLC activities? In Japan, community centers are basically established by local authorities, but not all the local residents participate there. Therefore, all participating countries, including Japan, face the same problems.

**Mr. Kusamiadi:** In Indonesia, an approach known as "open policy" has been taken. Through a policy that allows local residents themselves to suggest the kind of activities they want to do, prefectural or state-level governments select programs which receive grass-root responses or applications from individual CLCs, and ensure their budgets and monitoring.

**Ms. Dai:** Along with the social and economic development, local residents participate actively in programs conducted by the community in schools and centers. However, the problem consists of how

and how much the government can respond to the demands of local residents. There are many community schools for the elderly, but they are targeted to a limited number of people.

**Mr. Kamiyo :** In the case of Japan, because most community centers are run by government institutions, the problem consists of how to make the "participation" of such community centers successful. The challenge that is faced by most community centers consists of how to promote the participation of a large number of people of various backgrounds. In fact, one major issue is "how to ensure that



community centers have the capability to provide opportunities for learning", particularly, for young adults and local residents who face a variety of challenges in their area, for example: mothers who raise children without anyone to consult for advice, poor and needy people who live without a home or employment, and foreign residents who have difficulty blending in everyday life in their local area. I think it will not function well even under the leadership of the government. The case of Thailand can also be used as a reference to consider regarding the pattern of administration of community centers.

### **Knowledge and challenges for the promotion of participation**

**Mr. Sasai:** While programs are made on the basis of the needs of local residents, there is also a need to provide necessary learning programs such as literacy education. What kind of wisdom is needed to promote participation while taking this balance into consideration? We would like to ask you about the type of policy under which community centers in Japan provide such programs.

**Mr. Nakasone:** Departments have been established in self-governing bodies, to be in charge of resolving issues related to the environment, the elderly, and children. The Social Education Division has set up projects based on the following two perspectives. The first one consists of activities with organizations involving the participation of local residents in digging up new challenges, rather than setting up issues that should be learned from the government. The other one consists of educational activities in response to each issue handled by each department. The Social Education Division bases itself on the perspective of "how to live as a person", a concept aimed at supporting communities and ordinary citizens living with various challenges, rather than on know-how. In addition, we would like to expand the topics from issues that will animate those people, to topics such as "how people will relate from then on", and also the whole concept of the community.

**Mr. Yamamoto:** The community centers in Okayama city are very dynamic in their activities, and every year, they invite people involved in CLCs in other countries, and conduct workshops in association with NGOs in Japan. During the workshop which has been held in Okayama until yesterday,

the most popular topic of discussion was: "how to improve the capacities of community centers". One solution is the empowerment of the community center staff, and the other is the empowerment of the localities. Particularly, human resource empowerment of the staff will be a component element of the increase in the number of community center users, and of the promotion of community participation. Greetings at the counter and a positive attitude towards questions regarding issues outside one's range of responsibilities are also important for that purpose. Because it is important to increase the number of repeaters, it is also possible, for example, to ask students in Japanese language classes for foreigners living in Japan, to act as one-day teachers in international cuisine programs. The number of participants can be increased by allowing neighborhood residents to convey their own skills.

**Mr. Ogasawara:** Maintaining a balance between the creation of programs on the basis of the needs of residents and those on the basis of social needs is a very important issue for the field staff. All community centers are facing problems because of the low number of participants in activities related to social needs and local community issues. People need to realize the idea that there should be a change in the way officials work. For example, they should come regularly to the locality, and have opportunities to talk with school teachers. Local residents will not connect to each other unless officials connect to each other first. However, such activities are difficult to understand, even among staff at community centers. The key is probably to come back to the origins, to the early days of the foundation of community centers.

**Mr. Iwasa:** The common denominator of successful CLCs is that they offer programs leading to the improvement of people's income and quality of life. What kinds of concrete examples are there to illustrate this?

**Mr. Moedzakir:** From an academic standpoint, encouraging the active participation of local residents in CLCs is also a major issue in Indonesia. The concept is based on community participation, but putting it into practice is not easy. To obtain community participation, the program needs to be rooted in the community. For example, Indonesia has a large Muslim population, and for that reason, religious programs are preferred. Participation rate is also high in computer and English learning-related programs. However, ensuring a continuously increasing participation rate is a major challenge. We learned a lot from our visit to community centers yesterday.



**Ms. Buranakanon:** I would like to talk about an example of a successful case in southern Thailand. The region is an area of production of mangosteens, but for local residents, the problem was that the prices were determined by wholesalers, who kept the purchase prices low. Therefore, representatives of the local residents discussed and looked for possible solutions, as a community. First, it has been decided

that farmers should not sell mangosteens individually, but that the price setting should be done by all farmers altogether. Then, the government established a technological center there, and provided support for young farmers to improve their cultivation techniques. After these activities were carried out, they set prices higher than the market price, but they succeeded. This has become a source of revenue for local residents, and has been developed as a business that is suitable and profitable for them. Since then, the government needed to obtain permission from the group of representatives of the local residents each time they dealt with the mangosteen-related project. The community has been empowered, and it has become necessary for the government to respect the opinions of the local residents. In addition, although the leaders have not changed, the focus of the activities has gradually shifted to the younger generation. Such a case also shows that community planning needs to be in accordance with the realities in the region. The personality of the leader who has gained the trust of the community is important, and general improvements for the promotion of participation are also crucial. A profitable environment, which allows local residents to say "no" without worries, must be created. That is one of the objectives of CLCs.

**Mr. Khammang:** I would like to talk about voluntary participation at the community level, and about the decisive power of local residents. Based on the discussions we have had so far, and based on yesterday's visit to community centers, we have understood that there are various levels of CLCs, and that the contents of their activities and objectives are also diversified. In the case of Laos, most local residents do not have a high education level. Laos has a literacy rate of 78 %, and this is one of the major issues for CLCs. The majority of the population is composed of farmers, and the poverty rate is high. Because basic needs such as acquiring food and education are the first-priority issues for the local population, it is difficult to expect voluntary participation from them, and there is no other choice but to promote it gradually. The role of the government has been set to that of a facilitator. Programs must be rooted in people's needs. Anything other than basic skills and matters related to life improvement is difficult to appeal to the poor. The majority of programs combine literacy and basic vocational training, but once the local population understands that these are useful for daily life, they participate. In addition, if attendance to the vocational training results in a better income, more participation can be expected. Furthermore, leadership by people from among the local population is an important key to participation.

### **Learning to consider the local population as a resource**

**Mr. Suemoto:** One of the important points in international discussions on today's adult education is the perspective of "self-directed learning". What is common in all countries is a learning style in which the program is prepared by the government, or by the staff, for the local population to participate in. In this case, the staff has the responsibility, and a distinction appears between the "organizing" side and the "participating" side, causing a difference of standpoint between the "teaching" side and the "taught" side.



However, the learners themselves ought to have a lot more learning power and a lot more knowledge gained from individual experience. Even in the case of literacy education, adults have a variety of knowledge gained from life experiences, and have the ability to determine their own needs. The challenge consists of how to make use of these. Viewed from Japan's experience, the community centers during the post-war period were a "gathering spot" at their starting point. It can be said that those community centers were gathering places for local residents, and that they started off when the government called on those people to turn them into places where they could bring their own problems to each other. Therefore, the concept did not come from the idea of teaching something. This approach is believed to be based on the perspective of learning through actions, also known as "learning by action". What is important is not only what the organizing side should do, but also, what resources can be obtained from the side of the local residents.

**Mr. Shirato:** During the post-war reconstruction period, life was harsh, and people were likely to have the same problems in common. Particularly, for most people, the main activity was agriculture, and like in the example of Thailand, activities to raise the prices of farm products were conducted by community centers. However, as the communities grew richer, common problems decreased, and for the past 10 to 20 years, the activities of community centers appeared to be slack. It has become possible to earn an income by working individually, without depending on the help of community centers, as the government became fully functional. However, regarding the situation in the city of Matsumoto, it goes back to the perspective that, amidst the current political and economic impasse, it will not be possible to utilize community centers. On the basis of the discussions we have had so far, I think that when we consider the future of CLCs and community centers, it is important to take into consideration the times and the diversity of cultures and social structures within the community, to share experiences individually through exchanges, which will lead to solutions.

The issue of the proactive participation of local populations rather consists of how to bring together the individualized and isolated needs of local community members, and how community centers will deal with those. Community centers which promote the initiative of local populations are also faced with the same problem. However, rather than having community centers deal successfully with both issues, there is need to consider how community centers should be in order for the community to get better, and for people who live there to be happy.

### **The beneficial effects of exchanges**

**Mr. Yamamoto:** In the city of Matsumoto, exchanges with CLC and community centers in Asia were held in 2006. And in Okayama, which was appointed as a ESD model area by the Regional Centre of Expertise (RCE), exchanges progressed, as community center summits for the promotion of ESD have been held every year since 2007, with the cooperation of the ACCU and the UNESCO. The fact that

exchanges were held in provincial areas rather than in Tokyo has its significance. In Okayama, the experiences and backgrounds in each country were initially different, causing confusion. It took half a year to conduct the preparations, in cooperation with people in charge of neighborhood associations and community centers, mainly social education directors. So far, such exchanges have been conducted 4 times, debates have gradually started, and recently, there have been cases of cooperation as sister community centers. In such exchanges, people in Asia are amazed, and admire the fact that the Japanese are often surprising. For example, the fact that the programs of community centers are written in flyers and distributed to thousands of households, the fact that local residents voluntarily stick them on bulletin boards, and the fact of the cleanliness of footpaths between rice fields. This also allows the Japanese side to realize once more the importance of what has been done until now; and according to the voices of officials in the community centers involved, this had a great significance as an opportunity to study the area once again, and to have an exchange with various officials.

**Mr. Shirato:** An international conference was held in Matsumoto city in 2006, but it was noted that on the occasion, most participants were elderly people, and that youth participation was low. Recently, middle-school and high-school students have also become active in community centers. If exchanges are one-sided, participants get tired easily, therefore it is important to approach the issue with an attitude that says "We, too, have something to learn".

**Ms. Kawakami:** Since 1989, the National Federation of UNESCO Associations in Japan has provided support for literacy education and carried out CLC programs, under the name of '*World Terakoya Movement*'. However, it was not a one-sided support. Japan also learned a lot from the field. It is also important to give the young generation of Japanese opportunities to learn, by making them participate in study tours. In Cambodia, university students majoring in English language studies give lectures as volunteers on weekends. The perspective of mutual learning is also important, even in vocational training. A large number of CLCs are able to operate from the support provided by volunteering residents, even in the absence of full-time paid staff except a facilitator.

**Mr. Kusmiadi:** Indonesia's policy includes IT, preschool education and ESD into the programs carried out by CLCs; and examples from other countries, such as the case of the city of Matsumoto, Japan, are used as reference. The policy which selects areas such as literacy programs and preschool education to be the mainstream activities is also something that they have learned from other countries.

### **The roles played by community centers and CLCs**

**Mr. Choi:** I agree with both Dr. Suemoto and Dr. Shirato. The same problem is gaining importance in South Korea. From a global perspective, the rapidly increasing concentration of the population in urban areas is very serious; and at the same time, it also causes a problem of depopulation. I think that life-long learning is one of the possible solutions for the revitalization of provincial areas. In order to revitalize

grassroots activities, it is important to provide leadership training for local residents who are actively involved in the activities, and to facilitate the participation of the local population. So far, CLCs have conducted activities under the administration of the government, but recently, there have been attempts to promote the voluntary participation of local citizens.



**Mr. Zhang:** In China, activities conducted by young people have been increasingly dynamic.

Education-related community activities have attracted people's attention. One example is the so-called "half past four" schools, which are in charge of the after-school care of children whose parents are busy. Such schools are mainly operated by young people. In addition, young people are involved in a wide range of individual tutoring programs in support of language studies, science and mathematics, musical instruments, and spring and summer camps. From yesterday's visit to community centers, I have the impression that voluntary participation was apparently high among local populations in Japan; but I would like to ask about the position and the roles played by the activities of community centers in society.

**Mr. Matsumoto:** I think that the role of community centers is to bring solutions to challenges. There are various kinds of "problems", but when we try to solve them, they change and become "challenges". For that purpose, Shimane Prefecture is conducting a program called "Empowerment Program - Let's



revitalize our local areas by using the power of community centers!". In the past, community centers also faced problems similar to those currently found in developing countries, but, as stated earlier in the discussion, the nature of the problems is currently changing. When challenges are found and no solutions are suggested, the meaning of existence fades away.

**Indonesia:** Under the regime of President Suharto, the public was passive and less interested in nation-building. Recently, community participation in CLCs has been promoted to some extent, but social patterns and standards have not changed. Therefore, at this stage, it is difficult to separate the social participation of the community from the government. If the level of education of the population is improved, participation of the local population will also increase. Therefore, government intervention is, for now, necessary to some extent. From yesterday's visit, I felt that, like in community centers, human resources with university level specialized knowledge

are also needed in CLCs.

**Mr. Sunami:** The community is said to be a repository of local knowledge. However, the knowledge in question is hard to discover because it has not been formalized. It is important to know how to draw forth this knowledge and use it for regional development. Designing and carrying out a project under pressure from outside, and expecting local citizens to join, is not effective. The solution lies in the population. If CLCs generate knowledge from their local areas, then draw forth the pieces of knowledge and make use of them, such CLCs have potentials for the future. This is the reverse of conventional learning processes, and a distinction between "education" and "learning" is necessary.

### **Relationship between ESD and formal education**

**Mr. Sasai :** I think that direct discussions and exchanges, especially exchanges at the field level, are important in non-formal education. At the end of this roundtable discussion, I would like to ask Professor Shumba, from Copperbelt University, who is the observer and the only participant from Africa, to tell us about his impressions regarding the discussions we have had so far.

**Mr. Shumba:** I realized once again that community centers and CLCs have a strong power on community development and education; and I felt that they should be institutionalized within a legal framework and be supported. At the same time, however, I also felt that in the activities of CLCs, the



local population needs to have a strong ownership and responsibility while facing the challenges. In Africa, the problem consists of two lacks. One is the lack of financial and technical means, and the other is the lack of know-how. The latter is caused by the following process. There is no relevance between the formal education system and what happens in the regions. As a result, seen from the eyes of the community, formal education does not

seem to be related to the improvement of their own quality of life, and is considered not useful for community development. Also, because the technical know-how accumulated from research conducted in universities are not brought to the community, community residents feel that the formal education system does not give consideration to their customs and knowledge, but rather violates them. These factors lead to a lack of know-how.

To continue to expand the activities of CLCs in Africa, caution is needed. While satisfying the needs of the community and improving their quality of life, it is important to make sure that the nature and the content of the education provided in CLCs are relevant to these purposes. Because CLC is a place where people from different generations gather together to learn, there are substantial differences in knowledge

and sense of values. In addition, education has so far excluded issues that are important for the lives of local residents, such as the fight against poverty and disease, and drought and climate change. As a result, it is hard for people to see the existence of the problem of sustainable development. However, it should not be forgotten that activities conducted in Africa have an influence on the lives of people in other parts of the earth, and vice versa. ESD has been mentioned in almost all the presentations made during this symposium. By providing people with access to learning and improving their quality of life, CLCs may become an important means for the promotion of ESD.

It might be important to share experiences in international cooperation that reaches beyond the framework of Asia, particularly cooperation that includes Africa. Through written documents which allow to share experiences mutually, it can be understood that through literacy, vocational training, food security and resource management, CLCs can become a means of community education and development. For example, in the suburbs of Lusaka the capital of Zambia, there are localities which face issues of health and hygiene. Community-rooted organizations are conducting activities there to solve these issues. CLCs can share experiences with them, and can plan, decide and conduct activities along with them.

I think that the importance of frameworks and ownership should be recognized. The lack of know-how and the non-awareness of the relevance between the formal and non-formal education, are major problems. Community residents feel that schools do not contribute to their development, causing them to have a perception gap according to which the schools have nothing to do with their communities. The local residents are unable to recognize that their own local knowledge and skills are useful. I think that there is a need to connect communities with education, through CLCs. There is need to lead local residents towards realizing that CLCs are entities which are directly related to the community, and which offer them chances. CLCs are important for ESD; and for ESD, Africa is important. I would like you to pay more attention to Africa from the perspective of international cooperation. Documented knowledge needs to be shared beyond localities.

**Mr. Iwasa:** Because of the limited amount of time, issues such as the qualifications of social education leaders have been left undiscussed. However, what was good about this symposium was that yesterday, participants were able to go on-site and see the community centers for themselves, and share that experience as a background when they participated in the discussions. Although the field of social education has been considered as local issues, it has also been said that it is actually linked to issues in other parts of the world, in the same way as environmental issues. Such a perspective may also lead to the activation of community centers. In social education, field work is important. In the future, it would be good to continue exchanges, in which other regions will also be included.

## 清和公民館・八重原公民館(千葉県君津市)の視察報告



千葉県君津市の位置 (同市HPより)

12月13日開催の「国際シンポジウム:公民館とアジアのCLCの協力」に先立ち、来日したアジア諸国のCLC専門家や関係者たちによる日本の公民館の視察が同月12日に実施されました。

視察先として訪れた千葉県君津市は、沿岸部では製鉄業が盛んなほか、内陸部では「上総掘」として名高い同市発祥の井戸掘削技術により得られる豊富な地下水を利用した農業や酒造業が行われています。行政区分は大きく8つの地区に分類され、今回の視察先はそのうちの清和地区と八重原地区にある両公民館です。

緑豊かな環境の中にある清和公民館は、充実した内容の「館報せいわ」の発行や特色ある公民館活動を展開し、平成21年に優良公民館文部科学大臣表彰を受賞しており、また八重原公民館は新住民の転入が多い地区におけるコミュニティを支える拠点として、地域の急速な変化に対応した様々な活動を推進し、住民たちに交流の場を提供しています。

本視察では、君津市の生涯学習課の方々や両公民館の現場で実際に毎日活躍している公民館主事の方々、各種イベントクラスの講師やボランティアの方々、地域住民の方々にご出席いただき、各国からの参加者たちは運営体制や普段の活動内容などについての説明を受け、質疑応答や意見交換を行いました。

視察を通じて参加者たちは公民館の仕組みや状況への理解を深め、それぞれが自国のCLC活動を改善していく示唆を得るとともに、翌日のシンポジウムにおける議論の前提である公民館に対する知識や理解について、文献からのみでは得られない実際の現場の空気も感じ取ることができました。

### 実施日および実施場所など

日時:

2010年12月12日(日) 終日

場所:

清和公民館、八重原公民館

受入:

千葉県君津市教育委員会

参加者:

シンポジウム正式参加者13名(※インドネシアのオブザーバー2名を含む)、調査研究委員2名、文部科学省1名、ACCUスタッフ3名



清和公民館における意見交換、質疑応答の様子





参加者たちの質問に答える清和公民館の  
ボランティアや地域住民の方々

## 視察内容

### 【清和公民館】

親子教室見学  
 (「おばあちゃんの畑プロジェクト」  
 協力による「餃子づくり」)  
 公民館の運営体制と活動内容等の紹介  
 運営関係者、事業担当者、ボランティア、地域  
 住民へのインタビュー  
 質疑応答  
 施設見学

### 【八重原公民館】

公民館の運営体制と活動内容等の紹介  
 運営関係者、事業担当者へのインタビュー  
 質疑応答  
 施設見学、事業展示物の説明

両公民館での質疑応答では、各国の参加者たちは財政面や人材の育成、社会教育主事や公民館主事などの社会教育に関連する資格、これまでの実施事業の種別や頻度、地域住民の参加を得る工夫など多方面にわたる事項を熱心に質問したほか、図書室や茶室、調理室などの施設を見学し、君津市の公民館活動に対する理解を深めました。

本視察の内容を踏まえ、翌日のシンポジウムのラウンドテーブルでは、「日本での地域住民の自発的参加は多いように感じたが、公民館活動は社会においてどのような位置づけと役割を担っているのか」、「自国のCLCにおいても日本の公民館のように大学で専門知識を習得した人材が必要だ」など君津市の公民館の状況を前提とした発言があり、各国共通の関心分野への議論の方向づけや識見の交換に弾みを持たせる成果が得られました。



八重原公民館の入口



八重原公民館における意見交換、  
質疑応答の様子